

十九世紀の広東語(3)続 “個”

竹越美奈子

“個”：量詞から指示代詞へ*

*現代広東語では“個”([ko33]陰去)は量詞、“個”([ko35]陰上)は遠称の指示詞

—

量詞“個”([ko33]陰去)から指示詞“個”([ko35]陰上)への変化の過程とその条件について、前号では主に統計的手法から分析を試みた。その結論は以下のとおりであった。

始め“個”([ko33]陰去)は量詞と指示詞を兼ねていたが、意味弁別上の必要性から、“個個”(指示詞+量詞)の組み合わせにおける指示詞のみが陰上で読まれるようになった。その後、一語二音という不安定な状態を解消するため、最終的にはすべての指示詞が陰上になり、現在に至る。

張洪年(2006)では、歴史資料の記述を分析し、陰上が“個個”(指示詞+量詞)の組み合わせにおける指示詞から他の場合の指示詞に拡大する動機について、さらに詳細に記述している。同氏によれば、陰上がその他の指示詞にまで拡大したのは強調を表す用法が契機になったという。以下の歴史的資料からの引用は、いずれもその説を裏付けるものである。

- 1) “個” [ko35] : an emphatic demonstrative pronoun. (Eitel 1911:388)
- 2) When more emphasis or rather more distinctness in pointing out the particular object meant is required the *ko3* is repeated, as, however, the reduplication of *ko3*, i.e. *ko3 ko3* is used to mean every, each one, or all, to prevent mistakes the former of the two, when one is to be a Demonstrative Adjective Pronoun and the other a Classifier, is put into an upper rising tone as *ko2 ko3* and consequently written in a slightly different form to indicate that it is a colloquial word.(Ball 1883:43)¹
- 3) *ko3* used with the proper classifier. *Ko2* when particular attention is to be called to the object spoken of, and then often having the proper classifier following it.(Ball 1908:259)

¹ 引用文中のひとけたの数字2は陰上、3は陰去を表す。Ballの書では、声調が調値でなく、文字の四隅に記号をつける方法であらわされているため。以下同。

4) Compare *ko2 shue* and *ko3 shue*. In the first sentence the sense is emphatic; that place. In the second sentence it is not emphatic and best rendered there.(Cowles 1920:49)

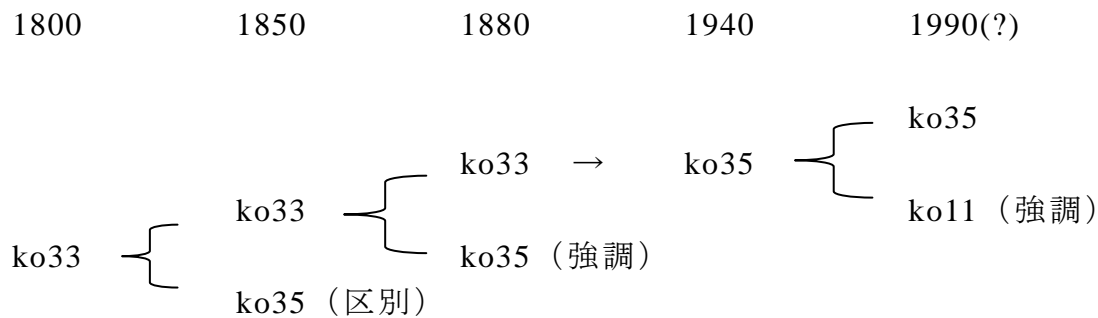
強調説でおもしろいのは、これと平行する現象が現代広東語でも観察されるということである。4)で Cowles は“咽處”の“咽”を *ko2* と読むと、*ko3* と呼んだ時と比べて強調の効果があると言っているが、これと同種の現象は現代広東語でも報告されており、通常陰上で読まれることの多い“咽”を陰平（調値は 11）で読むと、対比の意味合い強くなるという。

5) 唔係咽[ko35]度,係咽[ko11]度。そこじゃなくて、そこだ！（張双慶 1999.日本語訳は筆者による）

陰去が無標であったときには、陰上で読むことによって違いを際立たせることができたが、陰上が無標になってしまうと今度はまた別の声調で読まないというのを見せない、というのは納得できる。程度の激しさを強調する副詞（超～、めっちゃ～、激～）に次々新語があらわれては消えてゆくのと同じ原理なのだろう。

以上を図に示すと次のようになる。（張洪年 2006:831 より一部改変）

6)指示詞の変遷



引用文献

張洪年 2006 「早期粵語「個」的研究」『山高水長：丁邦新先生七秩壽慶論文集』 pp. 813-835.

張双慶 1999. 「香港粵語代詞」『代詞』廣州：暨南大学出版社。pp. 345-360.